

平成 30 年 6 月 26 日現在

機関番号：32307

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2017

課題番号：26750198

研究課題名(和文) 認知症高齢者における社会的認知：子供の発達過程との比較検討とその臨床応用

研究課題名(英文) Social cognition in older people with dementia: Comparison with social cognitive development in children and its clinical application.

研究代表者

山口 智晴 (Yamaguchi, Tomoharu)

群馬医療福祉大学・リハビリテーション学部・教授

研究者番号：50641461

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：社会的認知について、認知症高齢者での低下と子どもの発達過程との関連性を調査するため、幼稚園児と小学生165名に対して表情作成課題Y-FEMTを実施し、認知症高齢者におけるその結果と対比した。子どもは月齢とともに課題成績が向上し、特に顔の基本的構成能力を示す得点が早期に獲得され、次いで表情作成能力を示す得点が獲得される傾向にあった。これはアルツハイマー型認知症の進行による課題成績の低下のパターンを逆行していた。また、認知症高齢者のケアにかかわる医療・福祉専門職380名への調査では、社会的認知という言葉の理解度は低かったものの、8割以上が認知症高齢者のケアに社会的認知の視点が役立つと回答した。

研究成果の概要(英文)：To compare the social cognition trajectory between older people with dementia and children, social cognition in 165 preschool and elementary school children was assessed using Yamaguchi facial expression-making task (Y-FEMT). Results were compared with those for older people with dementia. Y-FEMT scores for children improved with age. Scores on the face's fundamental structure improved in the early stages; scores on the ability to make emotional facial expressions subsequently improved in contrast to the trajectory of declining scores for older people with Alzheimer-type dementia due to disease progression. A survey of 380 health and social service professionals caring for older people with dementia, revealed low awareness of social cognition, but over 80% of the participants regarded social cognition a useful indicator in caring for older people with dementia.

研究分野：認知症

キーワード：認知症 社会的認知 表情

1. 研究開始当初の背景

認知症の代表的な原疾患であるアルツハイマー病は、その中核的な症状として記憶障害が挙げられてきた。記憶障害に関する研究の歴史は古く、100年以上の歴史がある。しかし近年、アルツハイマー病患者の在宅生活を考えた場合、記憶障害とそれにより生じる生活上の問題と比べ、認知症の行動・心理症状 (behavioral and psychological symptoms of dementia: BPSD) の方が家族介護者の負担感や在宅生活の継続に影響すると指摘されているものの、BPSDの原因やその対処法に関する研究の歴史は浅い。近年の報告から、BPSDを増悪させる因子として、患者と介護家族間におけるコミュニケーション上の齟齬や介護家族の認知症に対する無理解などが指摘されており、これは臨床場面でも非常によく経験することである。特に、実生活上での円滑なコミュニケーションには、他者の意図理解やこころの理論といった社会的認知 (social cognition) が重要である。しかし、社会的認知は発達障害や心理的発達過程の分野を中心に研究が進められているが、加齢による影響やアルツハイマー病などの疾患特異的な影響については未だ先行研究が少なく、子どもの発達過程との関連性について検討した報告もほとんどみられない。認知症と子供の発達段階は同列に扱うことはできないが共通する事項も多く、アルツハイマー病の病期の指標である FAST (Functional Assessment staging of Alzheimer's disease) は、まさに子どもの発達過程を逆行しており、本研究では認知症者における社会的認知の障害過程を人間の発達との関連性から検討することを計画した。

また、本研究では社会的認知の障害を調べるだけでなく、専門職の支援や家族教育への応用を考えている。特に、社会的認知 (social cognition) という用語は、2013年に米国精神医学会が発表した「精神障害の診断と統計の手引き DSM-5」の認知症で低下する6認知機能領域のうちの1つにもなっているが、認知症ケアの現場では認知度が低く、認知症者における社会的認知の低下を認知症ケアに活かす視点の報告もほとんどみられていない。そのため、認知症ケアに従事する医療福祉専門職における、社会的認知に関する用語の認知度や、認知症者の社会的認知低下への理解度などについて調査することを計画した。

2. 研究の目的

研究代表者はこれまでアルツハイマー型認知症者における社会的認知の低下について調査するためのツール開発と、進行と共にその結果が低下することを示してきた。社会的認知の研究は小児発達領域で特に進んでおり、代表的なこころの理論課題も子どもに実施することを想定して作成されている。しかし、アルツハイマー型認知症においては、

進行と共に記憶や言語理解が低下するため、既存の課題では実施が難しいこともあり、言語性記憶を多用しないで社会的認知を評価する課題を作成する必要があった。そこで、特殊な機器を使用せずに福笑いのように表情を作成する過程から表情に関する能力を評価する山口表情作成課題 (Yamaguchi facial expression making task; Y-FEMT) を開発し、アルツハイマー型認知症者で進行と共に課題成績が低下することや、その結果を家族教育に応用する可能性などを報告した。今回は、これらのアルツハイマー型認知症者における結果が子どもの発達過程とどのような関連があるかを検証することを目的とした。仮説として、子どもの Y-FEMT 成績は、アルツハイマー型認知症者でみられた表情作成能力から低下した後に顔の構成能力も低下するパターンと逆行すると考えた。

また、認知症ケアに社会的認知の視点を活かすために、医療・福祉専門職における社会的認知やこころの理論といった用語の理解度、認知症者における社会的認知低下に対する理解度について明らかにするとともに、社会的認知の視点を認知症ケアに活かすことについて、どの様に考えるかを調査することを目的とした。

3. 研究の方法

顔の輪郭に顔のパーツ (目, 眉, 鼻, 口) を並べて、笑顔と怒り顔を作成する Y-FEMT を幼稚園年少～年長児と小学校1年～3年生計165名を対象として実施し、その結果と月齢との関連性などを検討するとともに、アルツハイマー型認知症者における結果との対比を行う。また、認知症ケアにたずさわる医療・福祉専門職や介護家族に対し、認知症者における社会的認知の低下と認知症ケアへの応用について、その知見を伝えてケアへの応用を探る。具体的には、認知症ケアに携わる医療・福祉専門職380名に対し、「社会的認知 (social cognition)」、「こころの理論 (Theory of Mind; ToM)」などの用語に対する認知度、認知症者における社会的認知低下に対する理解度についてアンケート調査した。また、同対象者に、認知症者における社会的認知の低下に関連した研修を実施し、認知症ケアに社会的認知の低下やその視点を応用する可能性について調査した。

4. 研究成果

Y-FEMT 課題の結果は、月齢と比較的強い正の相関を示し ($r=0.71$)、顔の基本的な構成能力が、顔の表情作成能力よりも低い月齢から獲得される傾向にあった。これは、表情作成能力を反映した得点から低下するというアルツハイマー型認知症者における能力低下を逆行する結果であった。また、中等度アルツハイマー型認知症者における Y-FEMT 課題の結果は、幼稚園年長児が実施した Y-FEMT 平均的得点と同等であった。

認知症ケアに携わる医療・福祉専門職 380 名へのアンケート調査では、「社会的認知 (social cognition)」の用語を始めて聞いたと回答した割合が 75%、「こころの理論 (Theory of Mind; ToM)」の用語を始めて聞いたと回答した割合が 82%、認知症者における社会的認知の低下を始めて知ったと回答した割合が 78%であった。しかし、それらの知見を知ることで認知症ケアに役立つかとの質問には、8 割以上が役立つと回答した。認知症者における社会的認知の視点を認知症ケアに活かすため、それらの用語や視点の認知度向上に努める必要性が示唆された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 16 件)

1. Yamaguchi T, Maki Y, Takatama M, et al: Gullibility may be a warning sign of Alzheimer's disease dementia. *International Psychogeriatrics*, 2018 accepted (in press). 査読あり
2. 山口智晴, 堀口布美子, 狩野寛子, ほか: 地域包括ケアシステムにおける認知症アセスメント (DASC-21) の認知症初期集中支援チームにおける有用性. *認知症ケア研究誌* 2: 58-65, 2017. 査読あり
3. 山口智晴, 村山明彦: 認知症の人の地域生活支援. *総合リハビリテーション* 45(9): 909-916, 2017. 査読なし
4. 山口智晴: 認知機能の低下と認知症予防. *Medical Rehabilitation* 206: 17-23, 2017. 査読なし
5. 山口智晴, 土屋謙仕: 認知症の病態と作業療法アプローチ. *OT ジャーナル* 51(2): 112-117, 2017. 査読なし
6. Tsuchiya K, Yamaguchi T, Fujita T, et al: A Quasi-Randomized Controlled Trial of Brain-Activating Rehabilitation in an Acute Hospital. *Am J Alzheimers Dis Other Demen.* 31(8): 612-617, 2016. 査読あり
7. 山口晴保, 上山真美, 小山晶子, 山口智晴, ほか: 平成 25-26 年度前橋市認知症初期集中支援事業の取り組みと成果. *群馬医学* 104: 75-80, 2016. 査読あり
8. 山口智晴: 多職種協働での認知症初期集中支援の実際 - 作業療法士としての視点で -. *Dementia Japan* 30(1): 51-58, 2016. 査読なし
9. 山口智晴: 認知症初期集中支援チーム

と作業療法士の役割. *臨床作業療法* 13(2): 26-30, 2016. 査読なし

10. 山口晴保, 中島智子, 内田成香, 甘利雅邦, 池田将樹, 牧陽子, 山口智晴, ほか: 認知症病型分類質問票 41 項目版 (Dementia differentiation questionnaire-41 items; DDQ41) の試み. *日本プライマリ・ケア連合学会誌* 39(1): 29-36, 2016. 査読あり
 11. Murai T, Yamaguchi T, Maki Y, et al.: Prevention of cognitive and physical decline by enjoyable walking-habituation program based on the Brain activating rehabilitation. *Geriatr Gerontol Int*, 16(6): 701-708, 2016. 査読あり
 12. 山口智晴: 多職種チームによる認知症初期集中支援の実際 - 作業療法士の立場から -. *老年精神医学雑誌* 26(10): 1085-1092, 2015. 査読なし
 13. 山口智晴, 大崎治: 認知症初期集中支援チームの取り組みとケアマネジャーとの連携. *達人ケアマネ* 9(6): 31-35, 2015. 査読なし
 14. 山口智晴, 堀口布美子, 狩野寛子, ほか: 前橋市における認知症初期集中支援チームの活動実績と効果の検討. *Dementia Japan* 29(4): 586-595, 2015. 査読あり
 15. 山口智晴: 認知症初期集中支援チームにおける作業療法士のかかわり. *OT ジャーナル* 49(7): 656-661, 2015. 査読なし
 16. 山口智晴: 認知機能障害のある人とのコミュニケーション. *OT ジャーナル* 49(5): 399-403, 2015. 査読なし
- [学会発表](計 2 件)
1. Yamaguchi T, Takatama M, Yamaguchi H: The effect of the Initial-phase Intensive Support Team for dementia in Maebashi City, Japan. *International Psychogeriatric Association International Congress 2016*, San Francisco, California, USA.
 2. Yamaguchi T, Yamaguchi H.: The new assessments of comprehending other people's behavioral intentions in Alzheimer's disease. *16Th World Federation of Occupational Therapists*, Tokyo, Japan. 2014
- [図書](計 5 件)
1. 日本作業療法士協会学術部(編集); 山口智晴 (著): 作業療法マニュアル62 認知症の人

と家族に対する作業療法；日本作業療法士協会（中央法規），2017.

2. 山口晴保, 山口智晴(編)；前橋市認知症初期集中支援チーム(著)：認知症の本人・家族の困りごとを解決する医療・介護連携の秘訣, 協同医書出版社, 2017.

3. 小川敬之, 竹田徳則(編)；山口智晴(著)（第3章：認知症の作業療法の実際：164-173ページを分担執筆）：認知症の作業療法 ソーシャルインクルージョンをめざして（第2版），医歯薬出版株式会社, 2016.

4. 松房利憲, 新井健五(編)；山口智晴(著)（認知症の作業療法124-129ページ, 認知症者の支援の実際130-145ページを分担執筆）：標準作業療法学-第3版-高齢期作業療法学, 医学書院, 2015.

5. 日本作業療法士協会学術部(編)；山口智晴(著)（章：認知症初期集中支援チームの実際20-27ページ；章を分担執筆）：作業療法マニュアル-59-認知症初期集中支援, 日本作業療法士協会（株式会社メディカルリーフ出版）、2015.

〔産業財産権〕

出願状況（計 0 件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年：

国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

無

6. 研究組織

(1)研究代表者

山口 智晴 (YAMAGUCHI Tomoharu)

群馬医療福祉大学・リハビリテーション学部・教授

研究者番号：5 0 6 4 1 4 6 1

(2)研究分担者：無

(3)研究協力者：無